

**製品名: NMDA $\zeta$ 1 (リン酸化 Ser890) ウサギポリクローナル抗体**

**カタログ番号: APRab05117**

研究使用のみ

## 概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	IHC, ICC/IF, ELISA
反応性	ヒト、マウス、ラット
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

## 応用

希釈倍率 IHC 1:100-1:300, ICC/IF 1:200-1:1000, ELISA 1:20000-1:40000

分子量

## 抗原情報

遺伝子名	GRIN1
別名	GRIN1; NMDAR1; Glutamate [NMDA] receptor subunit zeta-1; N-methyl-D-aspartate receptor subunit NR1; NMD-R1
遺伝子 ID	2902.0
SwissProt ID	Q05586
免疫原	抗血清は、Ser890 のリン酸化部位周辺のヒト NMDAR1 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 856-905

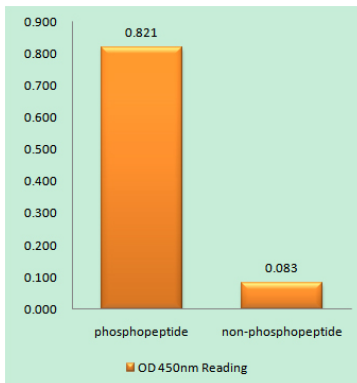
## 背景

この遺伝子によってコードされるタンパク質は、N-メチル-D-アスパラギン酸受容体の重要なサブユニットです。グルタミン酸受容体チャンネルスーパーファミリーに属するこれらの受容体は、複数のサブユニットがヘテロ多量体タンパク質複合体として配列し、リガンド依存性イオンチャンネルを形成します。これらのサブユニットは、記憶と学習の基盤となると考えられているシナプス可塑性において重要な役割を果たします。細胞特異的因子が異なるアイソフォームの発現を制御し、サブユニットの機能的多様性に寄与していると考えられています。選択的スプライシングを受けた転写バリエーションが報告されています。[RefSeq 提供、2008年7月]、機能: 高いカルシウム透過性とマグネシウムに対する電位依存的感受性を有するグルタミン酸依存性イオンチャンネルの NMDA 受容体サブタイプ。グリシンを介して伝達されます。このタンパク質は、シナプス可塑性、シナプス形成、興奮毒性、記憶獲得、学習において重要な役割を果たします。グルタミン酸神経伝達におけるニューロン機能を媒介します。NMDA 受容体の細胞表面への標的化に関与する。、オンライン情報: NMDA 受容体への侵入,PTM: NMDA は、おそらく PKC による NR1 アイソフォームの C 末端リン酸化によって制御される。Ser-897 の脱リン酸化は、おそらくタンパク質ホスファターゼ 2A (PPP2CB) によって行われる。そのリン酸化状態は、NMDAR-PPP2CB 複合体の形成と NMDAR チャンネルの活性によって影響を受ける。、類似性: グルタミン酸依存性イオンチャンネル (TC 1.A.10) ファミリーに属する。、細胞内局在: シナプス後細胞膜およびシナプス後密度に豊富に分布する。、サブユニット: ゼータサブユニット (GRIN1)、イプシロンサブユニット (GRIN2A、GRIN2B、GRIN2C、または GRIN2D)、および第3サブユニット (GRIN3A または GRIN3B) からなるヘテロ多量体チャンネルを形成する。ジスルフィド結合している。GRIN2A または GRIN2B、GRIN3A または GRIN3B および PPP2CB との複合体を形成する。DLG4 および MPDZ と相互作用する。

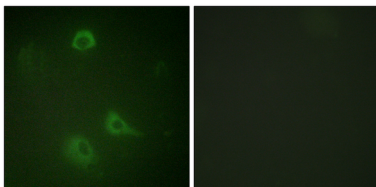
## 研究分野

カルシウム;神経活性リガンド-受容体相互作用;長期増強;アルツハイマー病;筋萎縮性側索硬化症 (ALS);ハンチントン病;

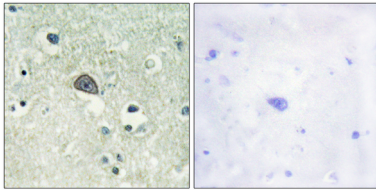
## 画像データ



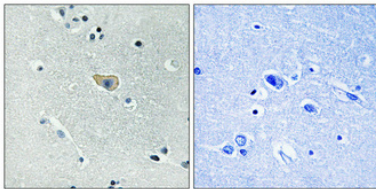
NMDAR1 (リン酸化 Ser890) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定法 (リン酸化 ELISA)



NMDAR1 (リン酸化 Ser890) 抗体を用いた A549 細胞の免疫蛍光染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした画像です。



NMDAR1 (リン酸化 Ser890) 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした状態。



パラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4℃、一晚) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。